

講演

地球資源環境学科卒業後の就職のあり方を考える
～地球資源環境学科学生・院生就職活動支援講演会より～

青山 美樹*・新屋敷太平**

**Some suggestions for students on how to find work worth doing,
and how to grow through work**

Miki Aoyama* and Tahei Arayashiki**

Abstract

This essay is based on a presentation given to students of the Department of Geoscience of Shimane University, in October 20, 2006, as part of a career development seminar. In our presentation we spoke about our respective experiences, responsibilities and pride in working as a geologist and an environmental chemist for the last few years.

Recently, many young people who are fresh from university or graduate school quit their first employment without careful consideration. In their first experiences working for a company after graduation, they may be bewildered by the gap between their ideal and the reality of their job. A major cause of their difficulty is that they often do not fully understand the purpose and duties of their companies, or the industries in which their companies operate. In the case of students graduating in Geoscience, a lack of fascination with the roles of geologists and engineers and a misunderstanding of which business fields are directly linked to their majors may cause them to be at a loss when considering which career to pursue.

We suggest that students should find work in their main field of interest which they can pursue with professional pride.

Key words: find a work, recruiting activity, a professional pride

はじめに

近年、若者の就業意欲の低さが問題となり、「ニート」や「フリーター」と呼ばれる、定職に就けない若者の割合が増え社会問題となっている。この問題を前面に押し出し、子供のうちから職業に就くことを考えさせるような書籍「13歳からのハローワーク」(村上, 2003)や就業体験施設「キッザニア東京」(東京都江東区豊洲)が流行するまでに至っている。

一方、本学科学学生の就職活動においても、専門職離れや本学科に直結する職業が見つけないことから、就職活動に困惑する学生が増えてきていると思われる。

この度、平成18年10月20日に開催された「地球資源環境学科学生・院生就職活動支援講演会」で著者自身の就職活動体験記や就職後の経験を講演することを依頼された。本講演では、「地球資源環境学科で学んだことを就職でどのように生かすかという在学生側の悩み」、「専門を生かした職業で社会に羽ばたいて欲しいと願う教授陣の願い」、「就職してから3～4年経った技術職で働く等身大の自分」の三方向の視

点を持ち、この三者間のギャップ、問題点を挙げた。

自己紹介

青山、新屋敷の両者は、1年違いで構造地質学研究室(小室教授)を卒業及び修了し、技術職へ就いている。青山は、土壌・地下水汚染調査及び浄化や国内外の資源調査を主体とする企業で働き、また新屋敷は、電力会社のグループ企業で環境調査を主体とする部門で働いている。

学生の時には両者とも、サークルに入り、地学団体研究会山陰支部の日曜巡検係や班長、学科内の学生役員、ティーチングアシスタントや留学生アシスタントの担当、多くの巡検や旅と、授業や研究のみに限らず学生生活を楽しんできた。これらの経験は、年齢を超えた人付き合いや物事を分かりやすく教えることに役に立っており、仕事やプライベートでも実感する。

研究は両者とも、鳥根県邑智郡桜江町(現、江津市桜江町)周辺に分布する桜江コールドロン(桜江層群)の構造解析を目的としていた。青山はマッピング、アナログモデル実験及びマグマ流動解析を主体とし、新屋敷はマッピング及び重力構造解析を主体として研究していた。

* 三菱マテリアル資源開発株式会社
Mitsubishi Materials Natural Resources Development Corp., Kitafukuro
1-297, Ohmiya-ku, Saitama 330-0835, Japan

** 東電環境エンジニアリング株式会社
Tokyo Electric Power Environmental Engineering Co., Inc., Shibaura 4-6
-14, Minato-ku, Tokyo 108-8537, Japan

就職活動タイムスケジュール

1年の違いはあるが、両者ともほぼ同じようなスケジュールで就職活動をしていた。大学院1年の夏から冬にかけてインターネットや会社パンフレットで会社情報を収集し始め、説明会などに出席した。冬から春にかけてエントリーシートを提出し始め、第一次審査を受け始めた。青山は、地質コンサルタント系企業の審査を合格し、5月下旬に現職の内定を獲得した。新屋敷は、5月には営業職の内定を獲得したが、大学で学んだことを生かすため辞退し、直後に内定を獲得した技術職を選んだ。技術職の内定を獲得後、両者とも就職活動を打ち切り、研究に専念した。

就職活動中は職業への理解が深まらず、またバブル崩壊後の大量リストラ時代で雇用が少ない時期（就職超氷河期）でもあり、春先に他学部から一般企業の内定の話が聞こえてくると焦りを感じた。技術職の審査は初夏に行う企業が多いことから、一般企業相手の活動を行っていたのもこれらが理由である。

今の仕事：大学で学んだこと

1年近い就職活動を経て就職した現在の会社では、大学で6年間学んだことを生かせる場面に多々直面した。学生時代の研究内容には化学分析を一切用いなかったが、業務にはガスクロマトグラフやX線分析を多用している。資源に関する授業や他研究室の研究発表を聞いていたことで、短期間でこれら分析機器を理解し、仕事をこなす事ができている。また、地質調査や岩石の肉眼鑑定を多年にわたり続けてきたことにより、汚染調査や環境調査、資源調査ではボーリングコア観察や土壌観察、作図において力を発揮することができている。

知識を生かしている場面の1つとして、新屋敷の業務の1つのアスベスト分析を挙げる。昨年(2005年)夏から大きく報道されているアスベスト(石綿)問題により、細々と受注していたアスベスト分析が数ヶ月の待ちが出るほど需要が急増した。背景には、報道による世間の過剰な反応と、新分析法の確立があった。これにより、弊社も新分析工程を立ち上げることにしたが、新分析法は顕微鏡とX線回折分析を用い、また鉱物の知識も要求されるため、これらの知識を持っている新屋敷に担当を任せられた。

専門技術的な面での知識ではないが、仕事に携わる上で役に立っていることもある。依頼された調査における受注から納品までの流れと、卒業論文及び修士論文の流れには以下のような共通点がある。

- (1) 調査の内容把握 ⇔ 研究の意義把握
- (2) 調査計画書作成 ⇔ 調査、実験、分析の計画
- (3) 調査、分析、解析 ⇔ 調査、実験、分析
- (4) 報告書作成 ⇔ レジューメ、論文執筆
- (5) 納品時プレゼン ⇔ ゼミ発表、論文発表

依頼業務の1件名調査と、卒業論文1年間及び修士論文2年間は、ほぼ同じ流れで作業を行っている。ただし、仕事の

場合は数件名を同時に進めるという違いはある。

地球資源環境学科と職業選択

就職後2～3年間働き感じたことがある。仕事とは、費用対効果に合わせた利益追求が全てであり、技術職の場合、その中で求められることは広く浅い知識である。地質コンサルタントでは、「地質屋＝なんでも屋」として現場に関する知識を多分野にわたり要求される。環境の分野でも、調査分析業務には多種にわたる試料が依頼され、「地質屋＝土壌や岩石の知識」だけではなく、化学及び物理学の知識も求められる。

理学部系の学科は、知的探究心の追求を目的とする面が強く、専門的な知識を持つ反面、多方面の仕事に直結しにくいと感じることもある。特に、地球資源環境学科の場合、長い間地質学科であったため、就職先は地質コンサルタント系企業ばかりというイメージが強く残る。著者らも、地球科学に興味があり地球資源環境学科に入学したが、地質コンサルタント系企業に就職するために地球資源環境学科に入ったわけではなく、専攻と職業が一致しない就職活動期があった。教える側、教えられる側共に就職に対する考えの方向性が一致していないためか、就職活動中に著者らと同じ心境にあった学生が多かったと思われる。

しかし、現在の地球資源環境学科は、卒業と同時に有用な資格(技術士補登録資格、測量士補登録資格)が手に入り、専門知識だけではなく、地質、資源、環境、工学にわたる知識を所有することができる。今後は、「地球資源環境学＝広い知識を持つコンサルタント」として様々な分野での活躍が期待される。

活躍の場の一例として、地下資源利用を挙げる。現在、石油枯渇まで「あと40年」と言われているが、10年前も「あと40年」と言われていた。その理由として、探査技術の向上、採掘技術の向上(砂ごと採掘する)、採掘層からの資源抽出技術の向上(石炭層に石油採掘時に発生する二酸化炭素を注入し、メタンガスを採取する)、根源岩からの資源生成技術の発展など、資源価値向上技術の確立が挙げられる。地質学としての資源探査及び採掘技術だけではなく、資源学の知識を要求される資源生成技術や環境学の知識を要求される環境低負荷採掘技術の技術者としての活躍が期待される。

最後に

青山の名刺の裏には、英文で「GEOLOGIST」と明記されている。海外で仕事をする場合、何者であるかを示さなければ技術者として通用しない。「GEOLOGIST」と名刺に明記されていることは、会社からもGEOLOGISTと認められている証であり、自分がGEOLOGISTであることを改めて強く自覚するとともに、誇りに思うことである。

在校生には、地球資源環境学を専門として卒業し、就職するわけであるから、自身の学生時代に満足が持て、自信を持ち誇りに思える仕事に出会って欲しいと願っている。

謝 辞

赤坂正秀教授，木村純一教授には，今回の講演会の機会を与えて頂いた。Barry P. Roser 講師には英文要旨の添削をしていただいた。指導教官であった小室裕明教授には，多岐に渡りご配慮頂いた。三瓶良和教授，亀井淳志助教授，大平寛人助手，中村学技術職員及び構造地質学研究室火山ゼミに所属する院生・学部生には，講演会後に御討議くださり本文執

筆の参考となった。以上の方々に厚く御礼申し上げます。

文 献

村上 龍，2003，13歳のハローワーク. 455p. 幻冬舎.

(受付：2006年12月17日)